

## 日本医学会分科会活動報告

一般社団法人日本心身医学会  
理事長 福土 審

I. 医学および医療の水準の向上への貢献が日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会の独自の活動を以下に留意して記載をしてください。

### a. 特に学術的に重要と考えられるもの

心身医学会の対象疾患の一つ過敏性腸症候群(IBS)は大部分が心身症に属しており、心身医学会所属員が下記の論文を公刊して医学の発展に貢献した。

Enck P, Aziz Q, Barbara G, Farmer A, Fukudo S, Mayer E, Niesler B, Quigley E, Rajilic-Stojanović M, Schemann M, Schwille-Kiuntke J, Simren M, Zipfel S, Spiller R. Irritable bowel syndrome (IBS). *Nature Reviews Disease Primers* 2: 16014, 2016. IF 40.689 全科学論文中の上位1%論文。IBSの心身医学的側面を明らかにした。

Fukudo S, Kinoshita Y, Okumura T, Ida M, Akiho H, Nakashima Y, Nishida A, Haruma K. Ramosetron reduces symptoms of irritable bowel syndrome with diarrhea and improves quality of life in women. *Gastroenterology* 150: 358-366.e8, 2016. IF 17.373 下痢型IBS女性にセロトニン3受容体拮抗薬を処方できるのはこの研究の成果による。

Francisconi CF, Sperber AD, Fang X, Fukudo S, Gerson MJ, Kang JY, Schmulson WMJ. Multicultural aspects in functional gastrointestinal disorders (FGIDs). *Gastroenterology* 150: 1344-1354, 2016. IF 17.373 世界の臨床を変えた国際診断基準ローマIVを分担した。

Fukudo S, Endo Y, Hongo M, Nakajima A, Abe T, Kobayashi H, Nakata T, Nakajima T, Sameshima K, Kaku K; Mizagliflozin Study Group. Safety and efficacy of the sodium-glucose cotransporter 1 inhibitor mizagliflozin for functional constipation: a randomised, placebo-controlled, double-blind phase 2 trial. *Lancet Gastroenterol Hepatol* 3 (9): 603-613, 2018. IF 14.789 IBS関連疾患の新規治療法を開発。

Van Oudenhove L, Kragel PA, Dupont P, Ly HG, Pazmany E, Enzlin P, Rubio A, Delon-Martin C, Bonaz B, Aziz Q, Tack J, Fukudo S, Kano M, Wager TD. Common and distinct neural representations of aversive somatic and visceral stimulation in healthy individuals. *Nature Communications* 11(1): 5939, 2020. IF 12.121。内臓痛と体性痛の脳内回路の相違を明らかにした。

### b. 当該領域における国際的な役割

理事長福土審は心身症研究により2020年 Academic Rome Foundation Fellowship Awardを受賞した。

名誉理事長久保千春は2011年8月～2013年9月まで国際心身医学会(ICPM)理事長と

して当該領域を国際的に先導し、その後、現在まで ICPM Executive and Advisory board members である。2005 年第 18 回世界心身医学会議を会長として神戸にて天皇・皇后陛下のご臨席のもと主催した。また、多くの海外での国際シンポジウムに招聘され、研究発表を行っている。

さらに、1994 年～現在までアジア心身医学会会長として、アジアにおいて 2 年毎にアジア心身医学大会を開催をして、教育、研究、臨床や人材育成に貢献している。

理事吉内一浩は米国心身医学会機関紙 *Psychosomatic Medicine* 編集委員、国際行動医学会の International Collaborative Studies Committee の委員長として貢献している。

### c. 活動からもたらされる社会的な意義

代議員 安藤哲也および幹事 関口敦が中心となり、摂食障害全国支援センター（国立精神・神経医療 研究センター）を運営し、東北大学病院（宮城県）、国府台病院（千葉県）、浜松医大病院（静岡県）、九州大学病院（福岡県）を摂食障害支援拠点病院に指定し、摂食障害の予防、診断、治療、啓発活動により社会に貢献している。また、心身医学会年次総会の時に市民公開講座により、ストレス関連疾患克服の知識を広報している。

近年、わが国での死因では悪性腫瘍（がん）が第一位を占めており、がん対策基本法など国をあげてこの対策に取り組んでいる。心身医学もその全人的医療の実践としてこの問題に取り組んでおり、特に緩和医療・サイコオンコロジー（精神腫瘍学）の領域で貢献してきた。これを受けて、精神科医だけではなく、心療内科医でも診療報酬加算が認められるようになった。実際の診療場面だけではなく、研究と医療従事者への教育においても知識の普及に努め、社会的に貢献している。

### d. 学会運営上留意している点

機関紙 *Biopsychosocial Medicine* のインパクトファクターを上げ、また掲載された日本心身医学会会員の引用数が多くなるように努力している。

II. 日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会と他の分科会との連携による活動を記載してください。

日本消化器病学会の IBS 診療ガイドラインに協力し、2020 年にその更新を果たした。また、日本内科学会の専門医制度の充実に貢献した。

日本精神神経学会の病名検討連絡会に参加し、DSM-5 および ICD-11 の摂食障害関連領域の日本語病名を担当し、新たな日本語病名の作成に貢献した。